これと反対に若いお嬢さん方が普通のお太鼓では淋し過ぎますから、一寸お着換えになつた時は、変つた結び方になさると、帯う晴立ちますし、後姿が若々しく見えます。口絵や挿畫にある寫眞の帯結びでも、お太鼓の変化したような結び方なら、礼裝の時ばかりでなく、小紋風のお召や縞物に羽二重の帯程度の時にも応用出来ますから、礼裝の時ばかりでなく、もつと廣く応用して頂きたいと思ひます。

寫眞にある帯は全部委しく図解して説明してありますが、これはどの帯をどんな人に結んでも必ずこの通りにするとは限りません。つまり帯には丸帯でも飛模様がありますし、模様の大小もあり、締める方の身体にも依りますから、私は同じ恰好に結ぶ時でも、帯の模様によつては少し変化させます。どんな場合でも鳥とか人物、舟、家などが逆さ向きにならぬよう氣をつけたいものです。併し帯の模様のつけ方は略同じように出来てゐますから、挿畫通りにお結びになれば大抵は模様が正確に現れます。

帯揚げと帯止め

帯は後の結び方ばかりでなく、前も大切です。斜に締める方もありますが、粋向や中年の方の軽裝にはよいものですが、お若い間は矢張り眞直に締める方が上品でございます。

帯揚げは若い方の盛裝の場合は、前の上で擴げる方が華やかです。これは別の帯揚げを締めて置いてから、ほんの裝飾として用ひるので、後から前へ持つて来ましたら、口絵寫眞第廿四図にあるように、先づ右を美しく帯の上へかけて美しく擴げ、左の方で帯に挟みましたら、左の方をそれに被せるようにして右で止めるのです。胴が太い割合に短い帯揚げでしたなら、後では芯に被せず、身体に添つて巻くと前でたつぷり使へます。

若々しい結び方十種

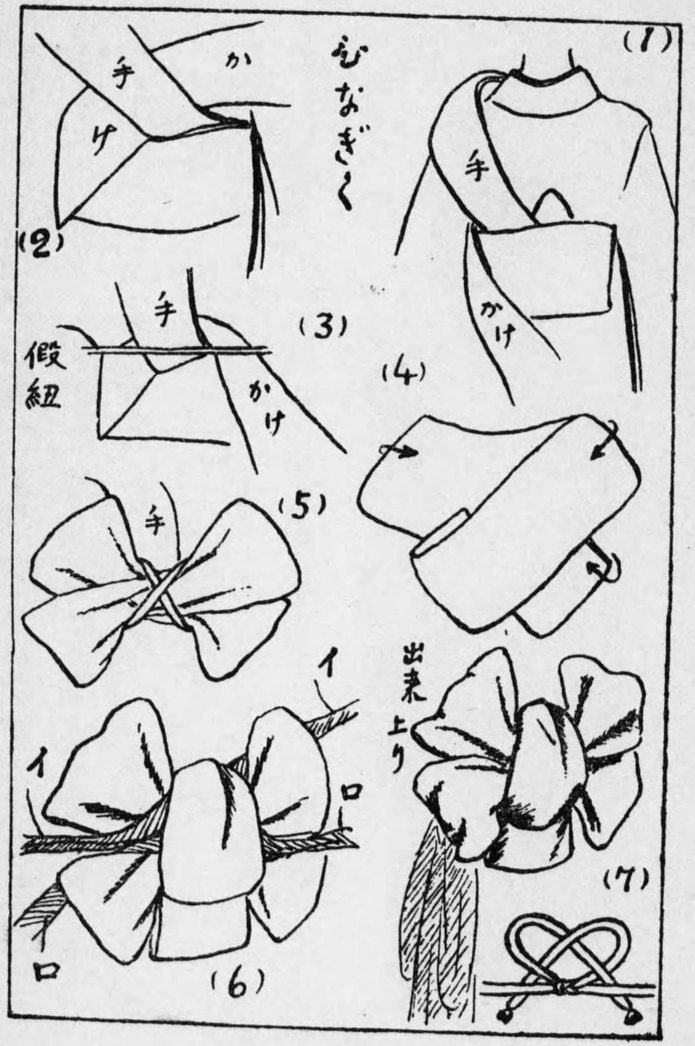
一、ひなぎく

これは帯の丈が少し長く要る結び方ですから、小さい方でないとよい恰好に出来ません。七八才頃から十四五才の方によいでせう。先づ手は肩からかけて帯の下位までに取つて、第(1)図の如く後へ芯を挾み、二つ巻きましたら、第(2)図のように手でかけを受け、かけを右下へ下し手で押へるようにして仮紙をいたしますと、第(3)図の如くなりますから、かけの右下で一つ輪を作つて左上で一つ、右上で又

一つ輪を作り、それを左下へ持つて来まして、長ければ第(4)図の如く折り返し、短ければ端のまゝにして置きます。その中央をぐつと締めるので、第(5)図のように、前の左右から紐を後へ出し綾にして前で結ります。そして上にあつた手を取り、中央に一つ、襞を作つて下の方はお太鼓のようにするのですが、小さいお嬢さんで、垂れが長かつたら上へ折返して垂れを輪にいたします。

この帯はかけを折合せて締めた中心が高くなつてゐますから、堅い織物の帯ならば帯揚げの芯を入れなくてもよい恰好の山になります。それで絞りの帯揚げなら第(6)図イの通りにかけて前で恰好よく擴

(くきなひ)

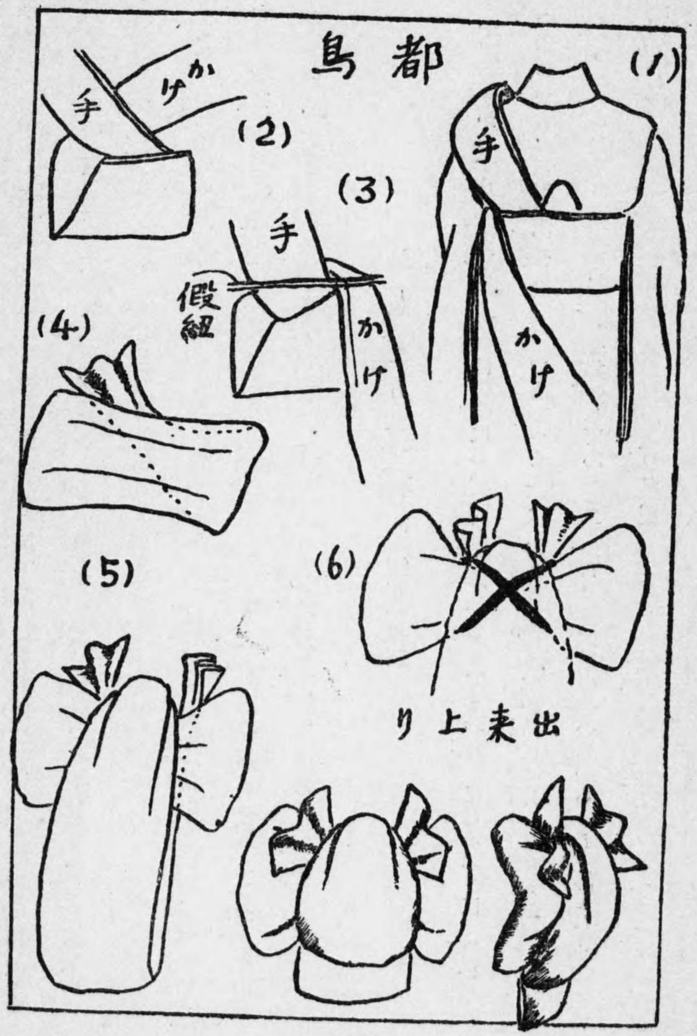


げ、長いしごきなら前からイのように通したものをロの如く出して横で結ぶのでございます。帯止めは幼い方なら大抵赤の丸衿けですから、普通に結び切りにするよりも、結び切つたものを第(7)図の如く大名結びにいたしますと、前が派手になつて可愛らしいものです。

二、都鳥

可愛らしい恰好ですから、十才前後から十六七才位までのお嬢さんに適した結び方です。

(都鳥)

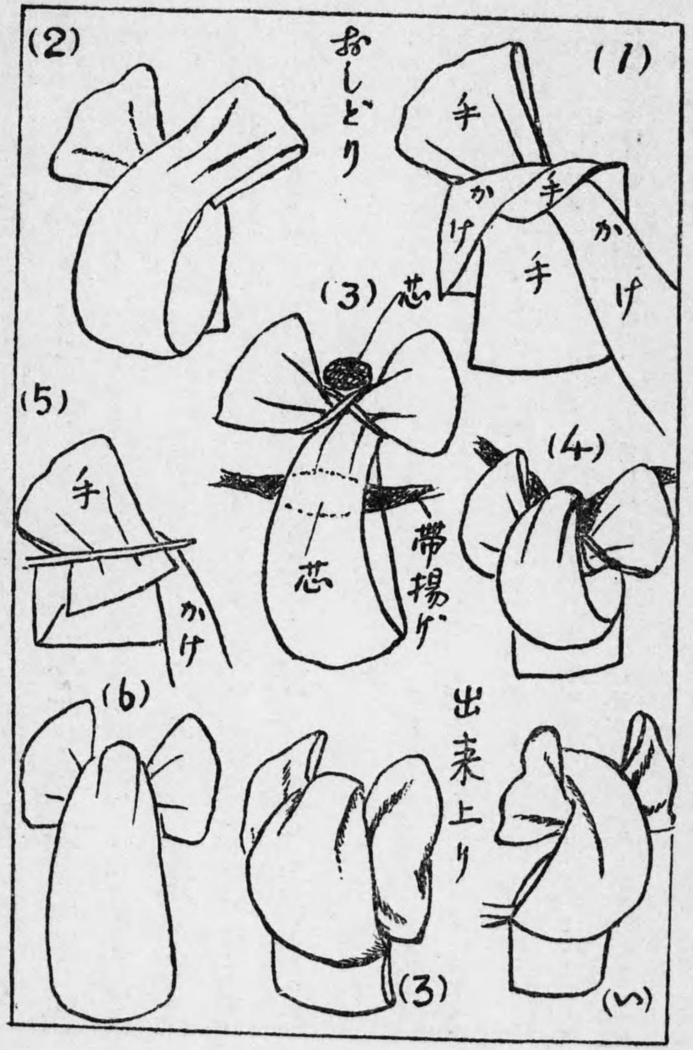


手は肩からかけて帯の下三寸位まで屆く長さにして、第(1)図のように後へ芯を挾みながら、第(2 3)図の順序で締めない結び方にして仮紐で結はきましたら、かけを左へ折り、又右へ折り、端は四つに折つて左の輪から上へ出るように折ると第(4)図の如くなりますから、今度は手を下してその先を四つに折り、かけの右の輪の下をくゞらせて第(5)図のように右上へ出し、そこで紐を前から持つて来てかけの左右の輪の中央が締るように綾にかけます。即ち第(6)図の如く、輪にだけかけるのです。帯揚げの芯を入れて山の恰好を作り、下は垂れを輪にしたお太鼓のようにして帯止めをすると出来上ります。

三、おしどり二種（口絵第一五圖）

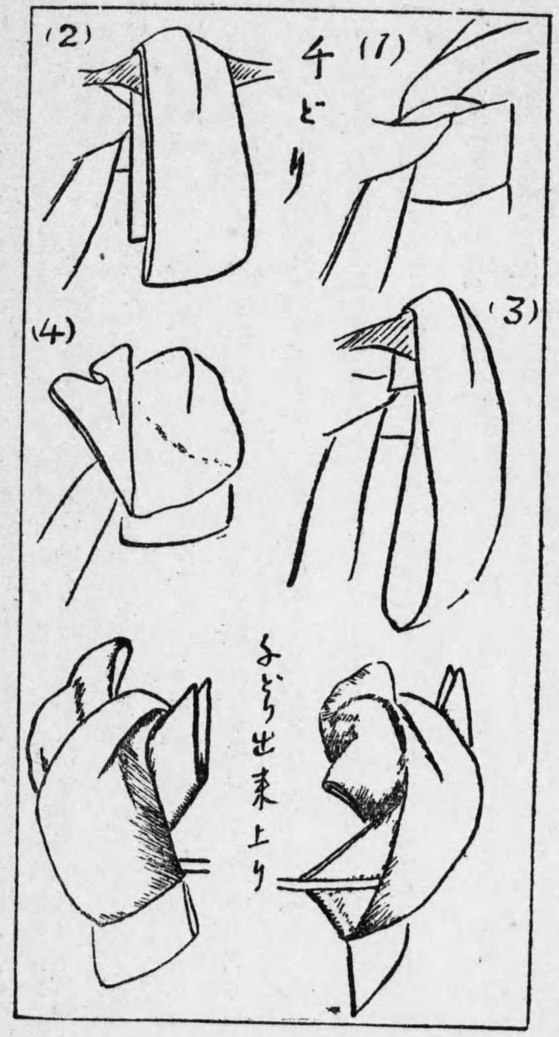
十四五才から十八九才位までの方に似合はしい結び方です。寫眞でもお分りになるように、堅い織物（左方）でも、羽二重の帯（右方）でも結べまして、お振袖を召さない時にも応用出来ます。

二つとも同じ結び方ですが少し手加減してありますから、羽二重の帯の方から申し上げませう。これは織出しの模様が一寸面白いので、それを垂れにいたしました。普通よりは少し長く手を取つて、手が



上へ出るように結び、手を全部引抜いて了はず、端で垂れを作り、上を輪にして置くと、第(1)図のようになりますから、かけの端を少し折り曲げて、第(2)図の如く右上へ出し、そこを第(3)図のように紐で綾にかけて締め、その上へ小さい芯(帯揚げの芯では大き過ぎますからハンケチか紙を丸めて当てがひます)を載せ、次には点線で示すように帯揚げを入れて、今載せた芯のもう一つ上へ持つて行き、第(4)図のように上から左右へ出して前で締めます。こうすると眞中が丁度お太鼓の上のようになつてゐますから、その部分と垂れの恰好をよく直して帯止めを締め、左右の上にある輪を、しやんと上へ出しますと、出来上り(い)のような形になります。

堅い帯の方は羽二重のように中央を締め付けず、もう少し開いたまゝにいたします。そして丸く結ぶ為め垂れを輪にするので手を肩からかけて帯の上までに取り、第(1)図のように結ぶなり、又は結ばない締め方にするなりいたしましたら、手の端を第(5)図のように折り、かけを前にしたと同様に(2 3 4)図のようにしますと、手が短く取つてありますから、帯揚げをした時第(6)図のような形になります。この下の方で垂れを作り、左右の輪をよく擴げると出来上り(ろ)の如く結べます。

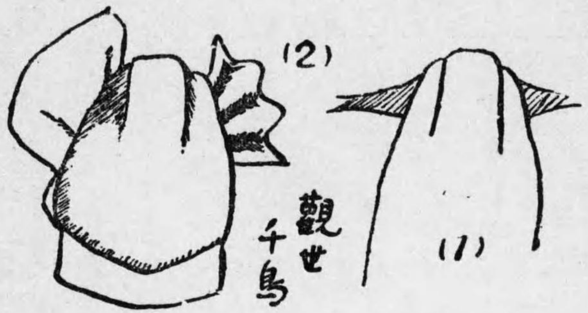


四、千どり

千どりは大分以前から結んで居りますが、お太鼓を派手にしたものですから、一寸した外出にも締められる結び方です。これは普通のお太鼓の時のように（第1図参照）手とかけを結びましたら、上下のない模様なら帯揚げをするのに、第(2)図のように上の中央を深く折つて締め、お太鼓を作る時に折返しはお太鼓の山よりも上へ出る位に高く第(4)図のように折るのですが、若し帯が短い場合や、この結び方では模様が逆さになる時は、第(3)図のように、織出しの方へ帯揚げを当てますと、丁度よい模様が出ます。これはお太鼓の部分が一枚になり、垂れが輪になります。次には手を斜に右上へ出し、お太鼓の下は自然に右へ曲つてゐますから、垂れもそれになぞへて同じ位に曲げ、帯止めを片方は手の折り曲げた処へ、片方はお太鼓の下の隅へかけて締めると出来上ります。これは出来上り図のように中央がふくらんで居ると恰好がよいものです。

五、觀世千鳥（口繪第一九圖）

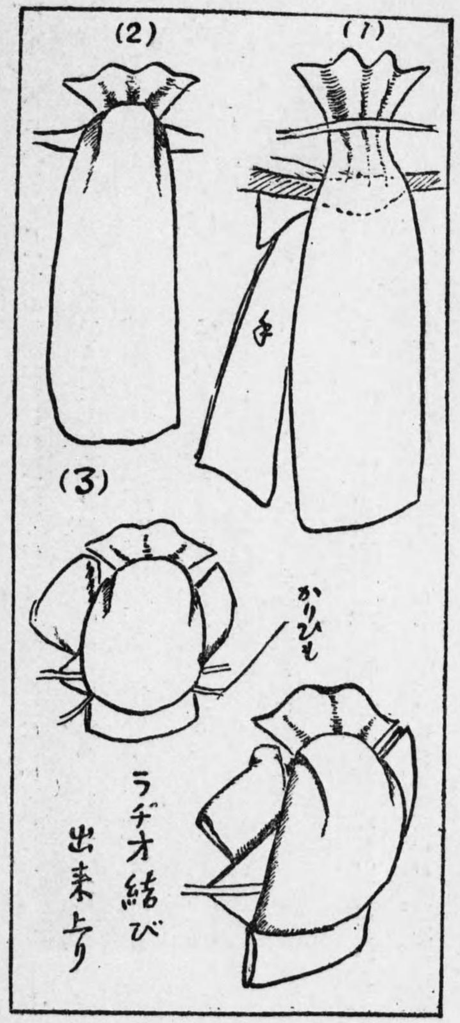
この結び方は千どりと殆ど同じ事で、只山を作る時千どりよりは幾分か廣くする為め、二つ襞を取つて第(1)図のような形とし、手の先を六つに折つて開くのです。手を扇形に開いてある為め、全体がばつといたしまして、紋服などの場合にも締められます。二十才過ぎの方で紋服や社交服など召した時には、あまり四方へ擴がつたのよりは、こういふ結び方ですと落着きがありませう。



六、ラヂオ結び（口繪第十六圖）

東京放送局の一週年記念の際講演しながら結んだものでございます中央の上はアンテナを利かしたもので、先づ普通にかけと手を結び合せて締めましたら、かけの端を六つに折り、第(1)図のように中央へ持つて来て仮紙で眞直に結はへ、その少し下へ点線の如く帯揚げを入れて第(2)図のようにいたします。この時背中の中央が非常に低い方でしたら、仮紙の代りに帯揚げに小さい芯を入れて締め、その上へ普

通の帯揚げをなさるとよい恰好になります。それから後は千とり結びと同様に、折り込みを高く出し、手も斜に上へ出るようにして、お太鼓の下は丸くなるように形をつけ、一本仮紐を結はへてから、第(3)図のように帯止めをいたしますと出来上ります。この帯もほんの一寸したお召替の時に結べるさつぱりした恰好です。

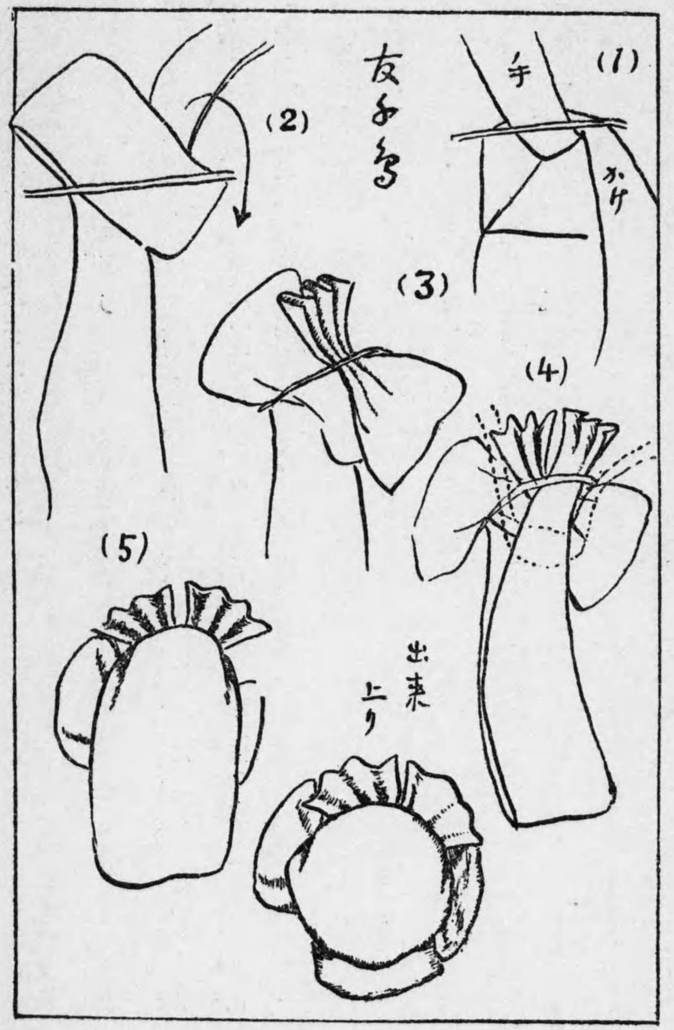


七、友ちどり（口絵第一八圖）

（ラヂオ結び）

まことに賑やかな結び方ですが、これは飛び模様の帯を結びましたもので、飛々についた模様を全部現してあります。只片方の輪と上一つだけは無地になつてゐますが、飛模様でも手の織出しに小さい模様のある物なら上は片方が大きい模様、片方が小さい模様になつて寫眞のよりも一層美しく出来ます。総模様でこれを結びます時には、「都鳥」の結び方で、織出しの部分を「都鳥」の時よりは上の中央へ眞直に出すだけの手加減でよいのです。こゝでは飛び模様の場合の結び方にいたしますから、「都鳥」とは少し遠つて参ります。

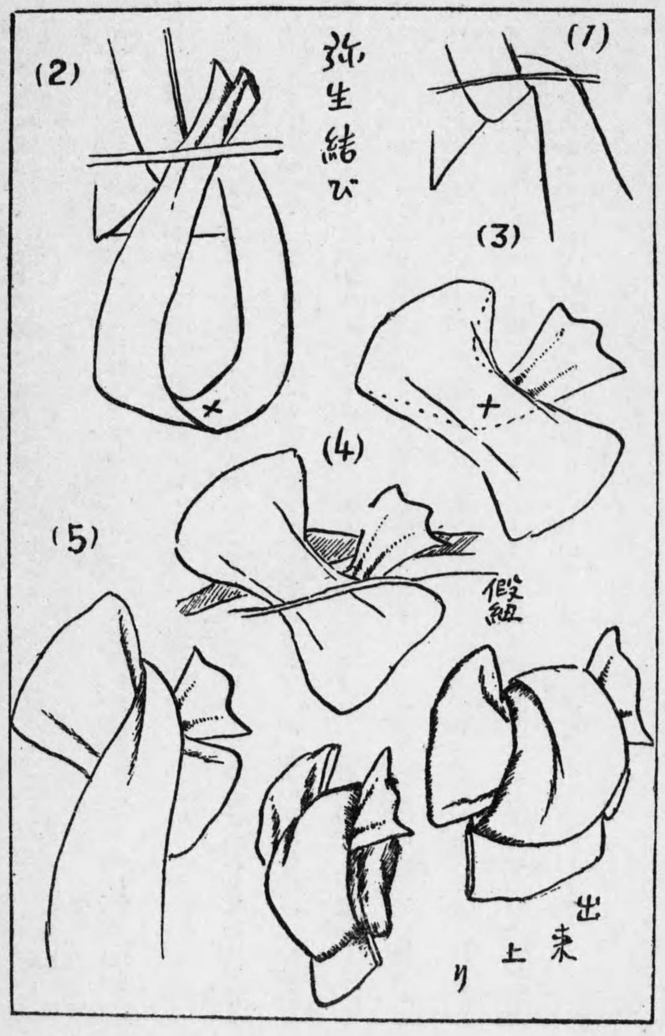
手は前模様が前の中央へ出る限りなるべく長く取ります。前模様が長くついてゐる物なら初めから手を肩からかけて帯の上あたりまで来る位に取ればよいのですが、帯によつて前模様が極く僅かの間しかない物は、初めにそれを定めてから手を取り、第(1)図のように仮紐をしましたら、かけで左上に一つ輪を作り第(2)図のように仮紐に通して抑えて置き、手を矢印の通り右へ下し、端を六つに折つて第(3)図の如く左上へ出し、かけの残りも端を六つに折つて右上へ出しますと、第(4)図のようになりますから、点線の処へ帯揚げを入れ、第(5)図のような形になつたのを、下で垂れを作り帯止めをして、



上の左右二つの輪を出来上り図のような恰好に直します。

八、彌生（口繪第一七圖）

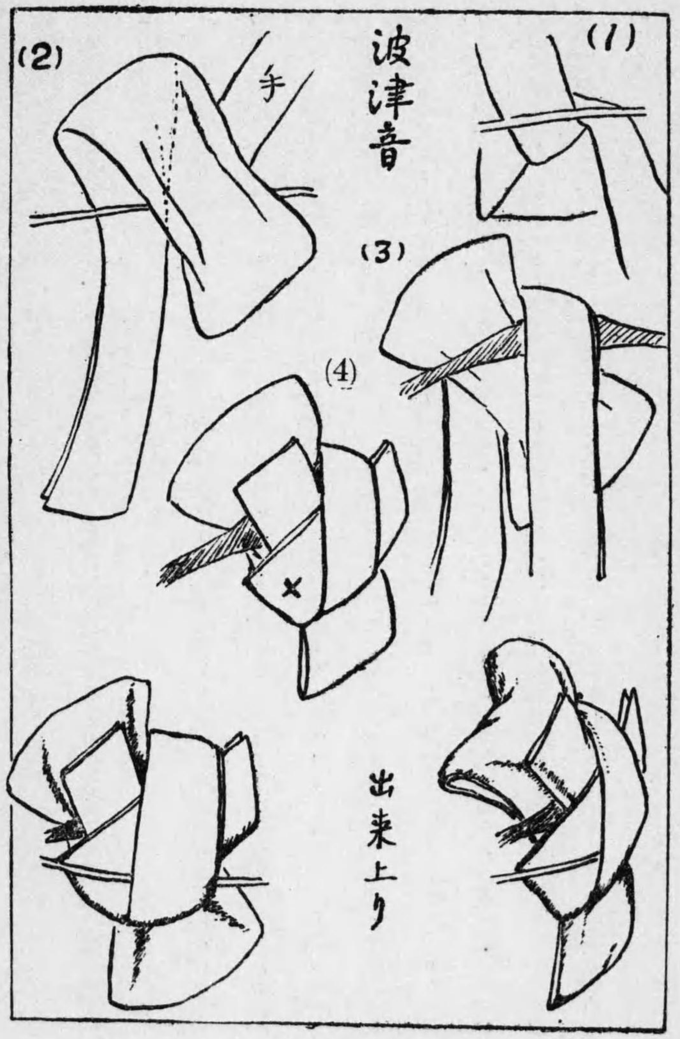
これは紋服にも似合ひますし、軽裝にも出来る形で、若々しい感じを持つた結び方でございます。初めに結ぶなら手を上に、結ばないのなら第(1)図のようにして、かけの端を四つに折り、右の上方へ出して置いて、その残り第(2)図×印の処へ巾三寸長さ七八寸位の芯を入れ、第(3)図のようにお立て矢の如くしましたら、そこへ帯揚げを第(4)図のような締め方にして、その上へ手を第(5)図の如くかけ長ければ垂れを輪にすると可愛らしくなりますが、短ければ一枚のまゝでもよく、お太鼓を丸く作つて帯止めをすると出来上ります。若い方の帯は垂れが輪になつてゐると何となく柔かい感じがいたしますから、羽二重や鹽瀬、綸子などの柔かい帯なら垂れを輪にし、堅い帯は長くても柔かい物ほど自由になりませんから、一枚にいたします。



九、波津音（口繪第一四圖）

お立て矢を賑やかにしたような結び方ですから、長い袂にぴつたりと似合ひます。併し中央に重きを置いて結びますと、短い袖の場合一寸粋な形になります。

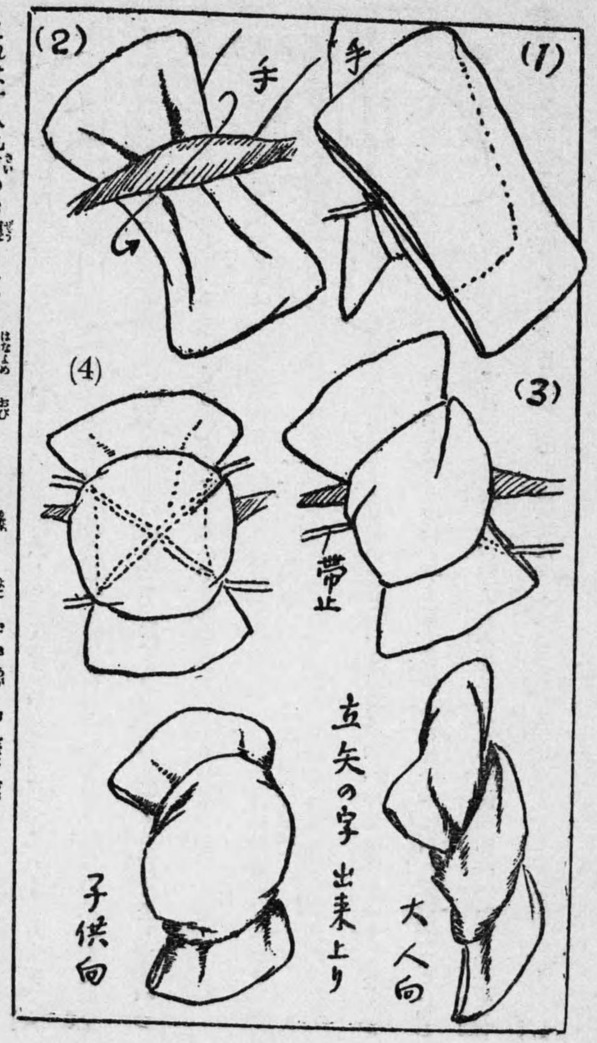
これも手は長く取つて第(1)図の如く仮紐で結はきましたら、かけで右下から上へお立てを一つ作り残りは仮紐に挾み、そこから第(2)図の如く二つ折りにして置きます。お立ての下の恰好をよく直して第(3)図のように恰好が崩れないように紐で軽く結はき、上にある手を二つ折りのまゝ山は美しく折つて下し、半巾のまゝ垂れのないお太鼓のように端を左上へ折り、かけの残りの半巾の分でその折込みを押へるようにして右上へ出しますと、第(4)図のようになりますから、帯揚げはお立ての上へ締め、×印の辺は皺がないように美しく折つて帯止めをいたしますと出来上ります。これは上の結び合せた半巾の辺りが、柔かい帯ではぐんなりいたしますから、堅い帯でないと結びにくうございます。



祝儀用にふさはしい帶七種

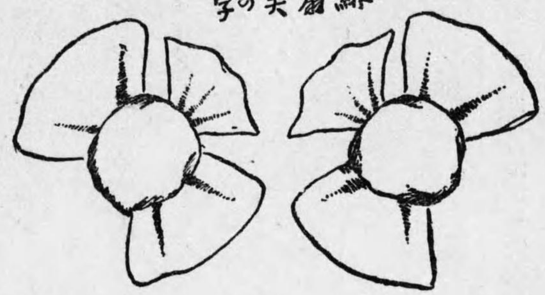
一、立矢の字（口繪第一圖）

お立て矢は昔からある上品な結び方ですが、定りきつてゐる形だけに、恰好よく結ぶにはなか〳〵骨が折れます。これは三四才の幼児から花嫁まで結べますから、年に応じて少しづゝ恰好を遠へて行くのです。結び方としては手を上へ拔いて締めます。手の取り方は中央へ一つかけて、織出しの部分を中へ折り込むだけあればよいのですから、結んで一尺四五寸の処がよいでせう。併し模樣の事も考へてよい部分が出るようにお取りになればよろしい。かけをすぐ下から折つて行くと、手を挾む時や帶止めの時下の輪が美しく出来ませんから、第(1)図点線のように上へ折り、芯を入れてお立てを作り、上を程よい加減に斜にして帶揚げを第(2)図のように締め、矢印の通り手を中央へかけ、端を中へ折り込みましたら、形をよく整へて帶止めは第(3)図のように、手を折込んだ上部から、下の輪の中側へ出して止めるのです。



これは十八九才のお嬢さんや、花嫁の帶としての形で、横は出来上り図大人向のようになるのですが十五六才以下の方は少し眞直に立てるようにいたします。即ち第(4)図点線のような紐で上下の形を整

へ、帯揚げも帯止めも眞直に締めるのです。これはお立てを作る前に帯揚芯を入れて置いて、紐を綾にかける時その芯の形をよく直すのです。そして上下も中央も丸味を持つように中央をふくらせますと、非常に可愛らしくなります。大人のはお立てを斜にしやんと脊負ふのですが、子供のはお立ての上下が丸く身体に添ふようになり、中央がふつくり高くそして擴がつてゐるようにするのです。



二、緋扇矢の字（口繪第二〇圖）

結び方は立て矢の字と同じ方法ですが、手の先を横へ出しますから、手は普通のお立てよりも長く取ります。前の図と同じようにしてお立てを作り帯揚げを結びましたら、手の先を六つに折つて帯揚の下をくゞらせて上へ出します。この立矢の脊負ひ方は、左でも右でも差支ありませんから、肩の恰好

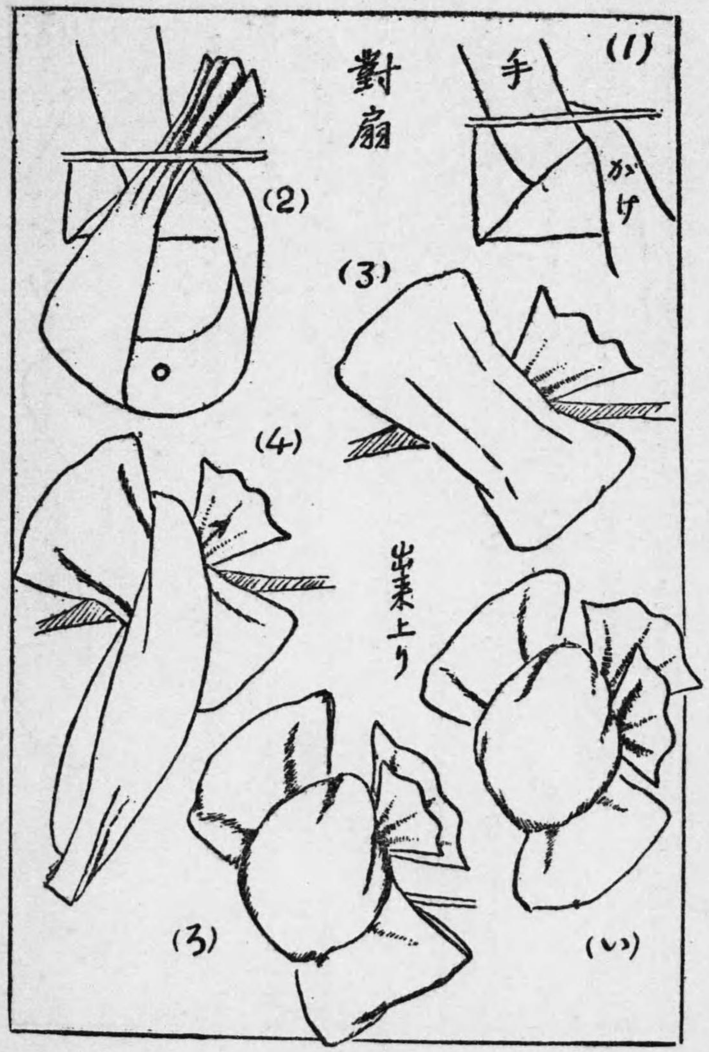
を見てよい方へ向ける事が出来ます。そして立矢の字の時よりは中央を引締めて置くのです。

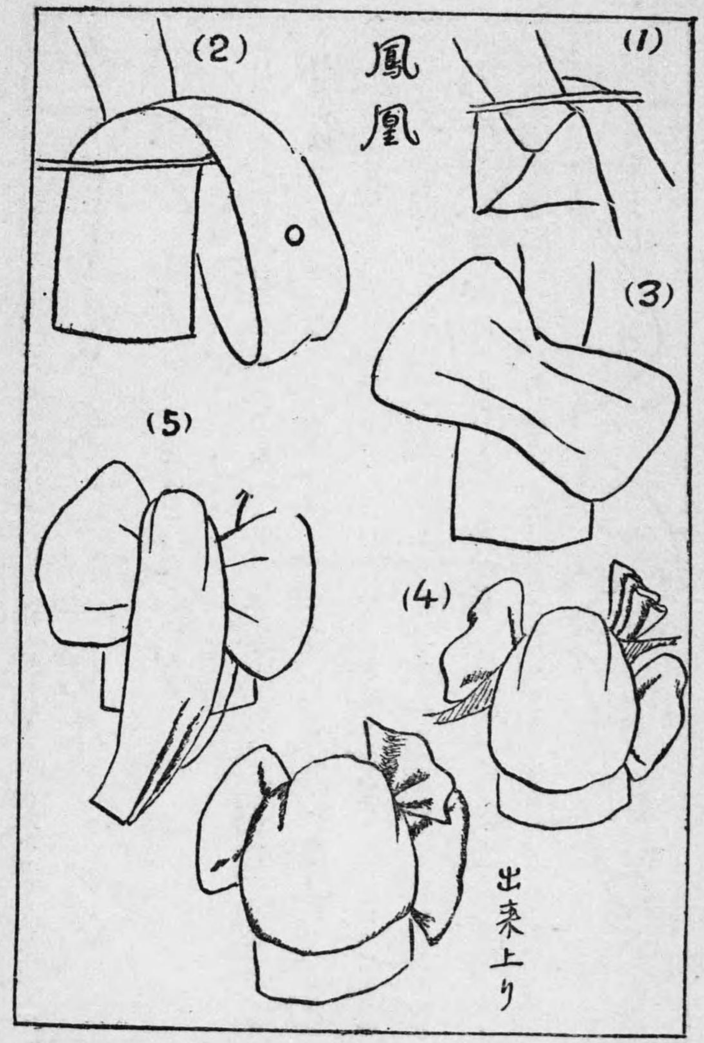
三、對扇（口繪第八圖及第一一圖）

これは前の緋扇矢の字よりも扇面が一つ殖えてゐるので対扇と名付けて居りますが、お芽出度い時の結び方に適します。寫眞でもお分りになります様に、日本髪にも束髪にも似合ふ結び方でございます。

初めに手は肩からかけて帯の上までに取り、（緋扇矢の字と同じ位の長さ）第(1)図の如く仮紐で止めましたら、かけの端を六つに折り、弥生結びの時のように仮紐に通して右上へ出し、○印の部分へ芯を入れて第(3)図の如くお立てを作り、その中へ帯揚げを締めます。そして手をその上へかけ、先は六つに折つてお立ての下をくゞらせて右上へ出します。これは前に出して置いたのよりはやゝ少く出すのです。中央の恰好をよく直し、立て矢の字の時と同じ塩梅へ帯止めをすると出来上ります。

扇面二つを擴げる時、下側の長く出してある方は大きく擴げ、上側のは小さく擴げるのですが、日本髪の時はこの二つを眞直に重ね合せず、少し上下に擴げますと出来上り図(い)のように華やかになりま


對扇
手
(1)
かけ
(2)
(3)
(4)
出来上り
(ろ)
(い)


鳳凰
(1)
(2)
(3)
(4)
(5)
出来上り

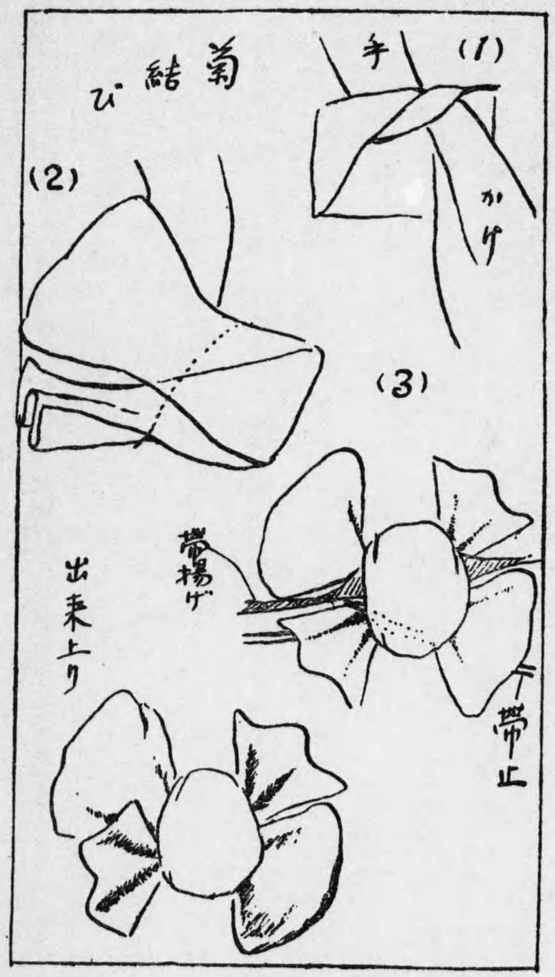
す。束髪はちんまりさせる為め、二つを重ね合せ、擴げ方も日本髪の時よりは幾分か小さくいたします
と(ろ)のような形になりすつきりいたします。

四、鳳凰（口絵第二二圖）

これは華やかな中にも非常に纏りの付いた形です。手は肩からかけて帶の中央へ届く位に取り、第(1)図の如く、結べましたら、かけの端を仮紐に通して程よい加減に垂れを出し、第(2)図○印の部分へ芯を入れて横に臥かせ、それを押へてゐながら手を取つて、山を第(4)図のような形に作つて帶揚げを締め、その先を六つに折つて下側から右上へ出します。そして下の方の恰好をよく直して帶止めすると出来上るのですが、手の先の六つに折つた部分を擴げる時、右下の輪よりも後へ突出すようにいたします。この帶は模様の細かい部分をよく見せる為め、あまり襞を取りませんでした。

五、菊結び（口絵第二三圖）

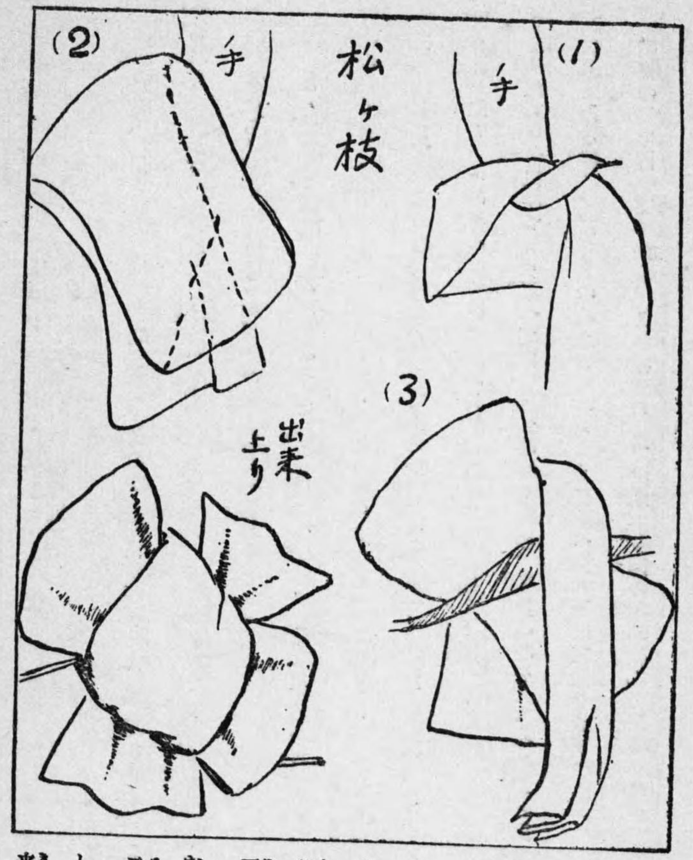
左右均等の取れた結び方ですから、少しも嫌味がなく上品で、束髪にも日本髪にもよく似合ひます。
そして模様は全部現れて参ります。



手を帯の横辺まで取つて第(1)図の如く結びましたら(結ばない締め方にしてもよろしい)かけを左上から右へ折り又左へ折り、端は四つに折つて第(2)図のような形を作り、これを肱で押えてゐてもよいのですが、結び慣れない方は点線の如く紐で結きます。そして手を下したら、端を四つに折り、下側から右の上方へ出し、帯揚げと帯止めは第(3)図のようにかけて締める時、出来上り図のような恰好になるよう、四方の形をよく直し中央はあまり大きく擴げないでちんまりとして置くのです。つまり眞中はきり〻と締つて、外側では花弁が艶やかに開いてゐるような形にいたします。

六、松ケ枝（口繪第二圖）

菊結びによく似て居りますが、これは斜に幹がある処へ、左右に枝が出てゐるような気持ちを見せたもので、第(1)図のように結ぶか他の帯の如く結ばずに仮紐で押えましたら、かけを右下で一つ輪を作り、左へ斜に上げましたら輪を作つて残りを下へ垂れて置きます。そこへ帯揚げをして、手は上を恰好よく擴げて下し、先を四つに折つて第(3)図の如く右の上へ出します。手の中央は巾一杯に擴げるか、



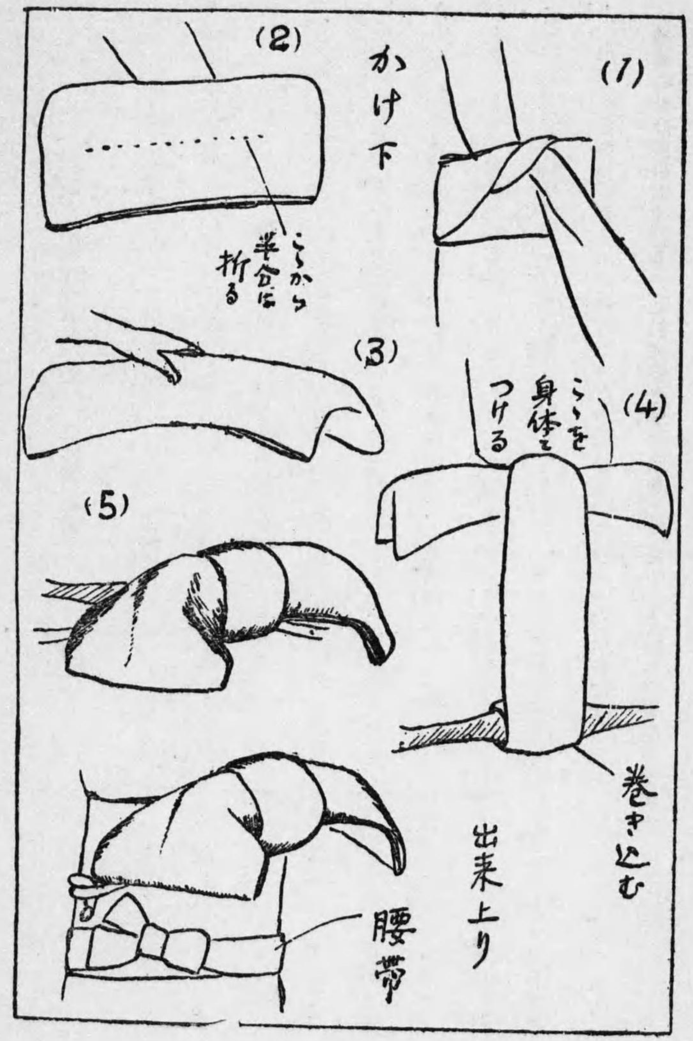
身体の細い方なら片端を折つて置くので、眞中ばかり丸く擴げるのではありません。帯止めはその手の下の処へ締め、垂れは平に擴げず、一つなり二つなり襞を取つて先を自然らしく擴げると、出来上ります。

七、襠褲下の帶（口繪第四圖）

褲下の帶は外から見えないものですが、これを上手に結びませんと、褲を召した時脊中の恰好がよく着られませんから、結び方は丁寧にせねばなりません。中央が高くて左右が同じ位の量になるように結ぶのですから、こゝに揚げる結び方が最も褲の恰好をよくします。

巾のまゝ卷きまして、結ぶ時手を半巾に折り、上へ引拔きます。かけをお立て矢にする位の長さに第(2)の如く折り、巾の中央点線の処から第(3)図のように折つて、その折り山が身体へぴつたり付くようにいたします。これを他の人が押えてゐるか仮紐でゝも一寸押えて置いて、手を上から半巾のまゝで取りましたら、その先へ帶揚げの芯を入れ、第(4)図の如く下側へぐるぐゝと卷きながら、結び目の処まで来たら身体にぴつたり添へて第(5)図の如く締め、帶止めをその下へ結ぶと出来上りますから、両方に出てゐる輪は、だらりの小さいものゝように下へ折り下げて置きます。

襠褲の時は腰帶ですから、これは股の後で出来上り図の如く結んで置くのです。

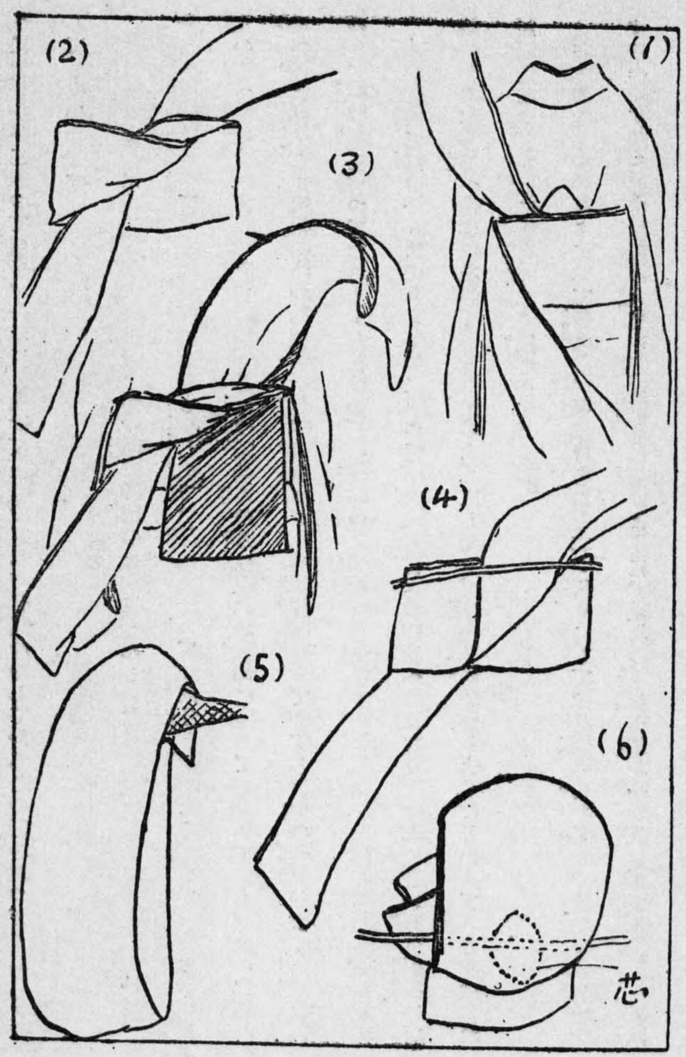


お太鼓のいろ〳〵

一、上手な結び方

私達は毎日一度や二度は欠かさずお太鼓に結ぶのですが、なか〳〵よい恰好に結べないものです。和服を着てゐる以上、お太鼓の結べない方はありませんが、恰好よく結べる方法を申し上げませう。

大抵の方は帯を結ぶ辺が凹んでゐるものです。それで高い帯揚げの芯を使ひますと、ごろ〳〵してよい恰好に出来ませんから、第(1)図のように帯揚げの芯なり、又は小枕なりを一つ挾んでから帯を巻きますと、帯の後が丸く巻けますのと、帯揚げ止めにも兼用出来ます。但し猫背の方はこの必要がありません。そして結ぶには普通第(2)図のように引抜きます。昼夜帯でならば引抜かずに、第(3)図のようにいたしますと、片側との美しい配合が生きて参ります。そして帯の模様が更紗風や丸く出た物ならば上下があまりありませんが、花鳥、風景、蒔絵風の柄で逆さに出したくないものは、こうして引抜かぬ締め方にした方が模様がよく出ます。又どうしても結びたくない、つまり結び鍵を厭ふ方は第(4)図のよ



うに、手を下に取つて巻き、一寸折り曲げて仮紐で結へ、帯揚げをしてからこの紐を取つて了ふようにしてもよいのです。

帯が締りましたら、帯揚げは第(2)図や第(4)図のようにしたものなら垂れの長さを適宜に定めて、そこへ帯揚げを当て、上は結び目よりも少し先で、帯揚げを当てた部分と巾をよく揃へてから、ぐつと上の方へ帯揚げをするのです。第(3)図の締め方の方は垂れを初めに定めてありますから、上の二枚を結び目より少し上で帯揚げをします。結び目のすぐ側へ帯揚げを当てますと、山の恰好がよく出来ないのと、結び目に当つてごろ〳〵しますから恰好が早く崩れます。

山の恰好に好きぐ〳〵もあり、年齢によつて、又は髪によつて遠へねばなりません。若い方は引抜いて締めましたら端へ帯揚げを当て第(5)図のようにしても、山の恰好が作りようございます。これは垂れが輪になつて如何にも若々しく見えます。

お太鼓を適宜の長さにして折込み、手はきちんと二つ折りにして、折返し目を美しく折つて帯止めをするのです。そしてお尻の大きい方は第(6)図のように、垂れの下側へ芯を一つ入れますと、帯と身体

がくつつきませんから、ふつくりしてお尻の大きいのが隠れます。

二、髪と年齢とに應じた形

束髪向のお太鼓

束髪の時は衿もあまり衣紋を作りませんから、お太鼓の恰好も極くさつぱりした感じにいたします。若い方なら丸く山形にして、帯を身体にぴつたりつけて帯揚げを締め、第(2)図のような恰好に、山の少し下をふくらませます。垂れの方は上と同じように丸くいたしますので、恰好をつけたら第(3)図の

(冊才台のお太鼓)

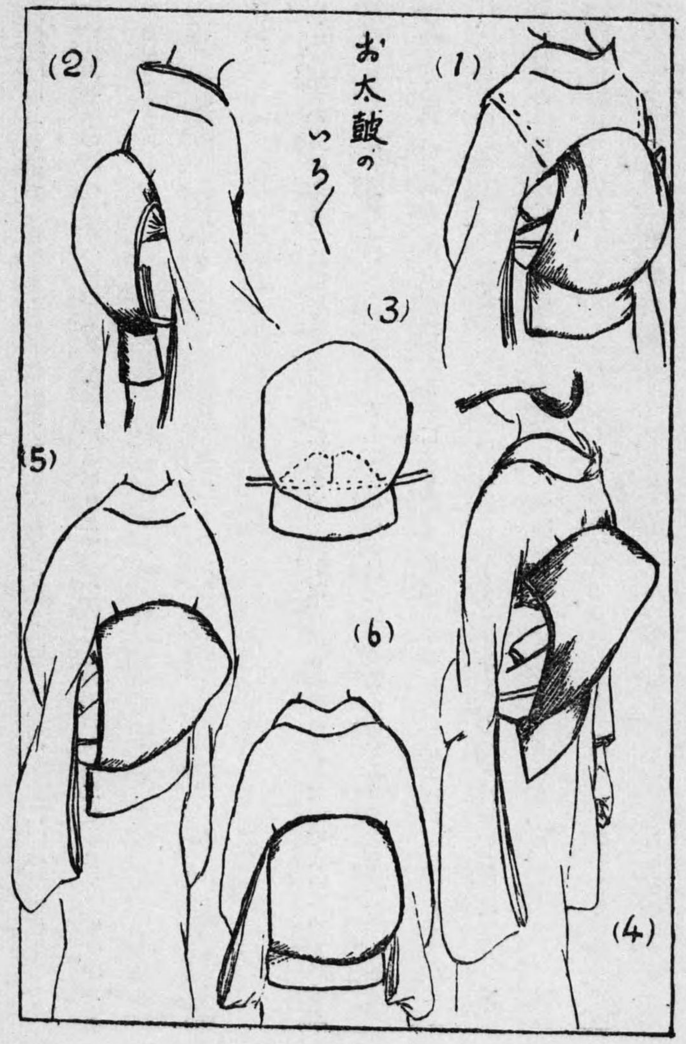
如く仮紐を一本締めて置きますと、この形が崩れません。

同じ束髪でも旧式なものは日本髪の時と同じ恰好の方が似合ひますが、洋髪では身体へぴつたりつけたのがよいようです。そして垂れはあまり斜に向けず、お太鼓の下と垂れを丸くくびらせて、垂れの端を開くようにいたします。

日本髪向のお太鼓

日本髪の場合は帯揚げの辺が高くなつてゐる形が上品です。下を折り込みました時、下の片端とその下の垂れを一緒に持つてぐつと上へ引くと、その部分が曲つて、下部と垂れと平均して斜になり、第(4)図のように、引いた方の上が帯揚げの少し下で一寸ふくらみます。

粋に結ぶには、帯揚げを脊へ当てた時、左右の母指で帯揚げの下側になつた二枚を強く押えてぐつと下へ引くと、帯の両側が身体に添つて引締り、お太鼓の中央でだぶ〳〵した余分の物がなくなり、粋な形に見えます。



肩揚げのある時代には、可愛らしく見える形がよいのですから、第(1)図のように山の処へ襞を取り、折り込みや手の端を両方へ出しますと賑やかになります。全体に丸い感じを持たせるよう、中央をふくらませるとよろしい。

二十才前後の方は、第(2)図のように丸く結ぶか、日本髪なら第(4)図の形で、もう少し短く丸く結びます。

三十才台の方は第(4)図や第(5)図の形にします。洋髪なら第(3)図のような形でよいのですが、山はあまり丸くない方がよいと思ひます。そして脊中の襞はずつと左右へ寄せるか襞なしにいたします。

四十才台の方は場合に依り、身体の恰好により第(5)図のようでも似合ひますが、五十近くなつた方は、第(6)図の如く、上方は眞直にして、下の方で少しふくらせますと、ぐつと落着いた形になります。

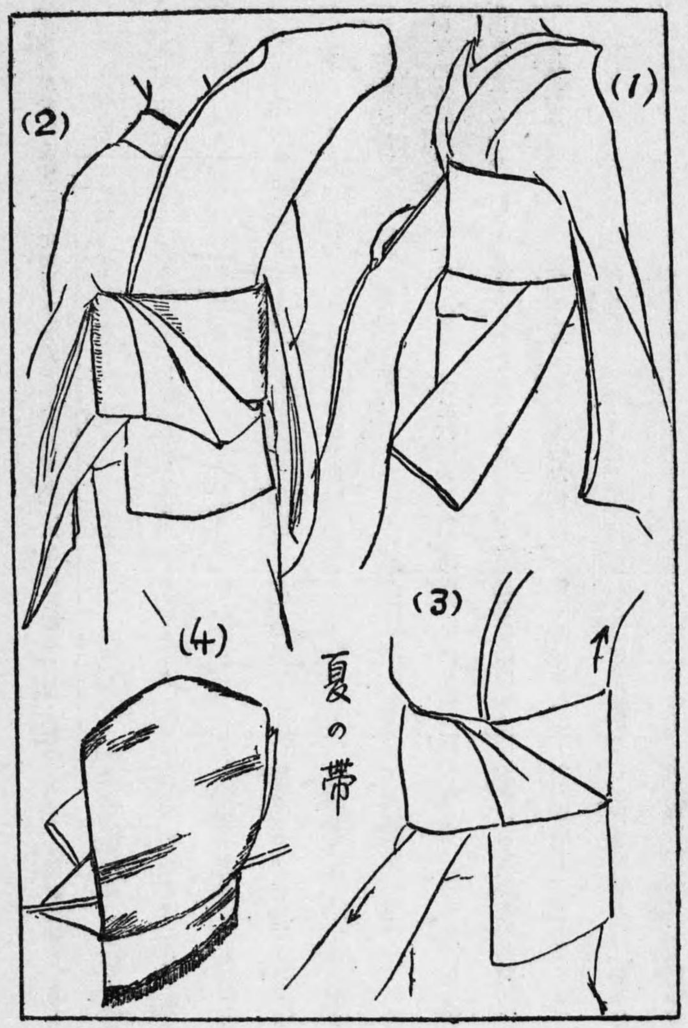
この時代の方は脊中に皺がないよう、左右の腋へ襞を取るのです。

帶の恰好は時の流行がありますから、少しづゝ工夫すれば、ほんの少しの引き加減や弛ませ加減で遠つて来ます。流行の如何に拘らず帶の中央がだぶ〳〵してゐるのは見よいものではありません。

三、單帶の上手な結び方

單帶はしやき〳〵してゐますから、自由が利かなくて、なか〳〵よい恰好に結べません。そして單帶をぎゆう〳〵引締めて皺を付けますと、一寸には直りませんから、これは引締めない結び方にいたします。お太鼓の引締めない結び方の時のように、手を下に取つて第(1)図の如く巻きましたら、後では第(2)図のように下へ折つて二つ折りを擴げ、巻いてある帶の下側から上へ輪に抜き、垂れになる部分を残して置きます。これを引締めるには、手とかけを同時に持ち、第(3)図矢印の通りに引きますと、巻いてある部分が好み通りに引締り、帶には後の三角形の部分に折り目が付くだけで、他には少しも皺が出来ませんから、いつまでも新しい帶のようです。これは最初の中一寸締め難いようですが、三四回結ぶと慣れまして、普通に結ぶよりも却つて楽な位です。解く時は垂れを下へ引き出すのです。

帶揚げを当てる時は、上が山形になるようにして下は垂れと共に恰好をつけ、少し斜にしますときりとして来ます。第(4)図のような形が、夏らしく涼しそうです。山から下までの間はなるべく引締め



て弛みがないようにして置きませんと、だれて来て不恰好になり、歩く毎にだぶ〳〵動いたりします。

よい恰好に結ぶには矢張り下へ仮紐をして、下の折込みが動かないように押えて置き、そこから手の折り目を美しく見せ、帶止めをするとよいのです。

若い方は山の処で第(5)図のように襞を一つ取って結びますと、襞の開く処で自然にふくらんでよい形になります。單帶は丸味がな

（羽織下の半巾帶）

かゝ付かないものですから、襞の開きを利用します。中年の方でも、帶揚げをする時に中側で中央に一つ深く襞を取りますと、山の恰好がよく出来ます。下側も矢張り折込みで左右を重ね合せるようにします。只帶揚げを脊負ひ、下を折込んだのでは眞四角な箱のような形になり易いのです。

お年を召した方ならこの結び方にしましたら帶揚げをする必要がありません。引結んだのと違つて結び目の皺がなく、山の部分は平に美しくなつてゐますし、帶の下から引揚げてありますので、帶は決して下りません。

半巾帶は締め方によつてなか〳〵氣の利いた形になります。單帶のような結び方にしてもよく、或は前

一九三頁(3)のようにして、垂れは矢張り残して置きます。帶揚げをしましたら、かけは斜に向けて、丁度手と結び合せるような気持ちで結びますと第(6)図の如く出来上ります。これは巾の狹いものですから、何処にも皺がないようきちんと結ばねばなりません、羽織下の結び方としても適して居ります。

四、堅い帶を一人で締める時

取込んでゐる際、それが親戚などですと、人手はたくさんあつても一寸帶結びを頼めない場合がよくあります。そんな時は手を肩へかけて卷くと帶が下らず上の方へ結び易いのです。最初の一と廻りを十分によく締め付けて身体へ卷き、二つ廻して結びましたら、ぐつと締めるのですが、望み通りの堅さに締らなければ二廻り目の方をぐつと引き、初めに廻した方を締めてから又結び目を締めるのです。最初の一と廻りを弛くして置くと、結び目で二廻り分締めなければなりませんから、強い力が要りますが、下側が締まつて居れば非常に楽です。

結ぶのに二廻り目の時手を下へ廻し、かけを右手でぐつと持つたまゝで、下へ出した手を、かけの上

へ廻して下へ出すと、長い部分を引廻さず、短い手の方で結べて了ひます。

この方法でなく單帶の結び方にしてもよく締められます。

帶揚げをする時二枚の端が美しく揃ふよう、二枚を合せて結び目より少し上へ締め、下の折込みの処では外側を引いて中側の方を少し弛める位にして置くとよく揃ひます。

正しい化粧と着付（終）

大正十五年六月七日印刷
大正十五年六月十日發行

正しい化粧と着付
定價金二円

著者　遠藤波津子

發行兼印刷者　東京市麹町區丸ノ内ビルヂング三五五區　都河竜

印刷所　東京市麹町區丸ノ内ビルヂング二三區　婦女界社活版部

發行所　東京市麹町區丸ノ内ビルヂング三五五區　婦女界社
振替東京二九三七番
電話牛込三二六五番
四八七六番
五〇八七番

大阪市北區堂島ビルヂング三〇一号
婦女界大阪支社
振替大阪二二三七四番
電話北一六二四番

不許複製
婦女界社

母之友叢書

母親の大學知識

▲皆様のお子様はお丈夫ですか。又皆様は子供を丈夫にそして賢く育てる秘訣をご存じですか。若しまだご存じなかつたら、一日も早く、母の大学知識を網羅した、この母之友叢書をお読み下さい。

▲八ポイント略字式新活字応用

▲四六判美裝各一編二百頁以上

▲定價各一册一円廿錢送料六錢

發行所
東京丸ノ内ビルヂング三階
婦女界社（振替東京二九三七）
大阪堂島ビルヂング三階
婦女界大阪支社（振替大阪二一三七四）

医学博士 望月寛一著

第一編 安産と難産

——本書の要目——

△妊娠の起る理由　△お産に必要な品々
△若年及び高年の初妊　△妊娠各月胎児発育狀態
△受胎せし男女の性別　△分娩豫定日の算出法
△妊娠中の摂生法　△分娩時の注意廿三項
△双児の出来る理由　△逆児を生んだ実例批評
△想像妊娠をした例　△前置胎盤手術と産褥熱
△妊娠中に起り易い病気　△流産と早産の実例批評
△葡萄狀妊娠の実例批評　△後産で苦んだ実例批評
△子宮外妊娠の実例批評　△産後に起り易い病気
△双角子宮妊娠実例批評　△産後の摂生法十五項
△妊娠と肺結核及び心臓病　△初生児の取扱法二十項
△悪阻の症狀と手当法　△早産児の育て方

大好評　これさへ読めば、お産は軽く、子供は丈夫。

津田敏子著

第二編 母の手藝

——本書の要目——

△便利な新案の下着三種　△可愛らしいエプロン
△春から夏への女児服二種　△子供帽子の作り方五種
△ロンパース（男児運動着）　△学校カバンの拵へ方
△八九才位少女用ドレス　△子供の喜ぶ人形六種
△軽快なレースの女児夏服　△気のきいた袋物二種
△十二三才位の通学服二種　△美しい手提袋二十四種
△レンコートと外套二種　△絽刺の図案と応用法
△新型マント二種（七八才用と十二三才用）　△テーブル掛のいろ〳〵
△活潑な男児用のジヤケツ　△美しい皿敷と座布團
△女児七八才スエーター　△美しいリボン刺繍
△赤坊用品編物のいろ〳〵　△洋風お寢巻と長襦袢
△流行のスカーフと筒袖

大好評　一読子供洋服でも編物でも何でも出来ます。

医学博士 吉田久造著

第三編 病児看護の批判

——本書の要目——

（夏に多い小児病）　（冬に多い小児病）
△人工哺乳の育児経験　△扁桃腺炎の子の看護
△金太郎の様に丈夫に　△肺炎を看護した経験
△お産後直ぐ妊娠して　△肺炎の手当法と注意
△消化不良児を丈夫に　△麻疹を看護した経験
△衰弱し切つた子供を　△百日咳を看護の経験
△乳児脚気看護の経験　△ヂフテリアの看護記
△哺乳児の栄養問題　△猩紅熱を看護の経験
△自家中毒を看護して　△種痘後の丹毒を看護
△疫痢に罹つた子供を　△結核性脳膜炎の看護
△疫痢の原因と豫防法　△子供の結核と血統
△赤痢に罹つた子供を　△脱腸手術を看護して
△腸寄生虫の豫防法　△法定傳染病の注意

好評嘖々　本書一册あれば、子供の病気には驚きません

文学士 上野陽一著

第四編 兒童心理

——本書の要目——

△大人と子供と何処が違ふか
△子供の教育されるのは何処か
△どうしたら良い子が生れるか
△胎教は本当に大切なものか
△子供の心の発達の順序
△誕生迄の子に適当な玩具
△絵本はどの様なのがよいか
△小学時代に適当な玩具
△避けねばならぬ玩具
△子供が記憶し出すは何才か
△記憶のよいのは賢い子か
△幼児の嘘をいふはなぜか
△子供が童話を好むわけ
△童話を選ぶに就ての注意
△子供の読物に就ての注意
△子供が判断する様になるのは
△子供の感情はどう育てるか
△青年期の善悪に対する判断
△柔順の習慣をつけるには
△強情な子はどう教育するか
△子供はどう叱ったらよいか
△正直勤勉の習慣をつけるには
△身体上智能上の異常児
△優秀児とはどの様な子か

大好評 これ程平易に説いた良い本はないと大評判。

太田三郎著

第五編 母と子の美術

——本書の要目——

△自由画の貴さ及び導方
△スケッチの手ほどき
△景色をうつす時の心得
△人間をうつす時の心得
△略画のお手本三十三種
△色と線(絵心と美粧術)
△「重ね」色あひ一覧表
△西洋絵画史物がたり
△世界で一番古い絵
△イタリーの絵の先祖
△文藝復興期の幕あき
△ミケロアンゼロ男性美
△ラフアエルの女性美
△油絵を発明した人
△風景画の起原
△現代絵画の父セザンヌ
△日本画流派一覧
△土佐派以前の人々
△土佐派の人々と代表作
△狩野派の人々と代表作
△四条派の人々と代表作
△文人画派の人々と代表作
△浮世絵派の人々と代表作
△光琳派

好評嘖々 著者洋行中蒐集せし得がたき名画数十枚挿入

深澤幾市著

第六編 母と子の科學

——本書の要目——

△びつくり盤と活動写眞
△蓄音機とレコード
△電池の用法いろ〳〵
△電鈴と盗難自報器
△便利な電気時計の構造
△吸上ポンプのいろ〳〵
△汽車の構造と速力
△自動車の走る理由
△水力発電所と水車
△発電機はどんな形か
△モートルのいろ〳〵
△電車はどうして走るか
△電信機の発明と応用
△電話機の内部の構造
△電話の交換台の仕掛
△無線電信の発明
△ラヂオの装置
△電燈と電球の作り方
△便利な家庭電熱器
△家庭と小型モートル
△雷はどうして鳴るか
△エッキス線の原理と応用
△飛行機の発明と構造
△飛行船とツエッペリン

好評嘖々 電気版、写眞版、木版、凸版等百数十個挿入

千葉春村著

第七編 童話

——本書の内容——

△私は太陽です
△雀の飛行機
△桃の宮
△金華山
△鷹の巣
△姫はさらはれた
△金の鷲鳥
△火打箱
△金の子供
△蝶々
△トランクの飛行船
△シンドバッドの冒険
△燒豚裁判
△風船うり
△かぐや姫
△僕は大きくなつたなら
△悪魔の首
△かやのつりて

好評嘖々 他では見られぬ面白いやさしい、美しい、勇しい童話選集です。

三宅やす子著

第八編 母の教育

——本書の要目——

△母親の教育の意義と範囲　△母の教育の完成は何で
△遺傳発見と生活の三角形　△母と子の関係と母の健康
△嬰児期の教育と母の經驗　△言葉の教方と子守の選択
△幼児期の教育と個性發見　△幼児の環境と習慣の善悪
△嘘の嚴禁と祕密を持たぬ事　△戸外の遊戯と食物の好き嫌
△間食や衣服玩具の注意　△お伽話・絵本の選方話方
△子供の質問と幼稚園可否　△児童期の教育と学校選択
△交友の選択と通学の注意　△叱り方賞め方と言葉遣ひ
△金銭問題と宗教問題　△活動寫眞・小説の選擇可否
△藝術教育と行儀のしつけ　△専門学課の習得と性教育
△戀愛問題と不良性矯正　△結婚を目標とする教育
△青年男女の交際と結婚　△子供の人数——結論

好評嘖々

三宅女史の愛と智の結晶した記録で、力と光明に充ちた大学知識。

大妻高等女学校長
大妻技藝学校長　大妻コタカ著

第九編 禮儀作法

——本書の要目——

△一般の礼儀作法（七項）　△日常の行儀作法容儀
△紹介の仕方紹介された時　△書信贈答の礼（八項）
△文体、宛名や氏名の書方　△賀狀、凶事通知の書方
△男女の礼裝一般（九項）　△公式及び社交の礼（十項）
△祝事賀宴の一般　△婚礼、葬儀、忌服
△訪問に関する礼（十六項）　△日本室洋室各接客法
△食卓の作法と配膳法　△室内の設備と裝飾（四項）
△贈答品に対する礼（七項）　△祝賀、餞別、見舞、返礼
△礼法と水引（廿四項）　△祝儀用凶事用水引
△男女出産祝の金包と水引　△合蝶、結納金包と二本鮑
△長熨斗と鶴結の作方　△目録包と亀結の作方
△末廣包と雌雄蝶結の作方　△箸包の折方外六種の作方

大好評

「礼儀三百威儀三千」といひますが、本書を一読すれば日常の礼法が何でも直ぐ分ります。

医学博士　太田孝之著

第十編 育兒の實際

——本書の要目——

△新生児の睡眠と黄疸　△乳児の健康標準
△新生児と乳児の体重身長　△母乳栄養の塲合の注意
△お乳の分泌と母の食物　△哺乳の方法と授乳の注意
△牛乳栄養の塲合の注意　△牛乳の鑑別法と蓄へ方
△牛乳の薄め方と添加料　△牛乳を与へる分量と消毒法
△瓶乳首等の選択と洗ひ方　△煉乳均等均質牛乳粉乳
△離乳期の栄養と鉄分不足　△離乳の方法とその時日
△離乳期の食物と分量　△幼児及び児童の食物
△栄養上重大な時期　△食べて良いもの悪いもの
△学校へ行く子供のお弁当　△子供の健康養護
△睡眠、入浴、衣服子供室　△清潔のしつけと習慣
△乳児幼児の運動と玩具　△育児上の実際問題廿八題

大好評

小児科の権威たる著者の最新の研究を傾倒せる最も合理的な育児法です。

医学博士　望月寛一著

第十一編 性病と不妊症

——本書の要目——

▲生物界の本能的傳統　▲優生学上より見た男女別
▲成女期と月経　▲月経時の精神的変態
▲成女期に注意すべき事　▲月経困難症の徴候手当
▲未婚者と婦人病の関係　▲処女膜退行不全
▲自瀆とその障害　▲変態性慾とその矯正法
▲初婚時代と性病　▲子宮内膜炎の原因手当
▲手術と子宝を得た実例　▲家庭と黴毒
▲痲疾は一種の亡国病　▲性愛と精神愛との一致
▲肪胱カタルの手当と症状　▲愛の隔離を来す不感症
▲不感症最近療法　▲不感症と不妊との関係
▲不妊とその原因　▲子宮の発育不全と不妊
▲不妊に対する時代錯誤　▲母性保護と産児制限

新刊出來

性病の種類、原因、療法、不妊症の原因、療法等を徹底的に述べたものです

KZZL-68

千葉春村著

第十二編 偉人の母

——本書の要目——

△後藤(新平)子爵の母　△東郷大將の母
△金子堅太郎子爵の母　△今孟母黒井氏の母
△森鴎外氏の母　△阪谷芳郎男爵の母
△原敬氏の母　△桂太郎公爵の母
△軍神乃木大將の母　△伊藤博文公の母
△佐久間象山の母　△吉田松陰の母
△頼山陽の母　△中江藤樹の母
△北条時頼の母　△楠正行の母
△賢母の鑑孟子の母　△英雄ナポレオンの母
△文豪ゲーテの母　△ガーフィールドの母
△カーネギーの母　△フレドリック大王の母
△ワシントンの母メリー　△偉人グラッカスの母

新刊　どういふ教育をすれば偉人になれるか本書は活きた教科書

三須裕著(最新刊)

手縫で出來る 子供洋服

四六判二二八頁　定價二円三十錢
挿画百八十余箇　書留送料十八錢

▲二三才から十五六才までの男女児用の可愛いハイカラな洋服の作り方が一読瞭然です。

東京高工教授 菱山衡平著(大好評改訂第四版)

實用 衣類整理法

菊判総布製箱入　定價二円三十錢
本文三百六十六頁　書留送料十八錢

▲洗濯、染色、汚点拔、仕上から衣類の保存法まで衣類に関する一切の整理方法が分ります。

終